

京都大學經濟學會

經濟論叢

第六十九卷 第三・四號

《社會經濟史特集》

- ヤスパースの歴史意識……………出口 勇 藏
- フォイエルバッハと市民革命（一）……………平 井 俊 彦
- ケネー學說における政策的背景（一）……………菱 山 泉
- プロシヤ農業變革についての一考察……………山 口 和 男
- 伏見酒造業の發達……………井 上 洋 一 郎
- クリストファー・ヒル編
- 『イギリス革命——一六四〇年』……………河 野 健 二

昭和二十七年三月

クリストファー・ヒル編

『イギリス革命——一六四〇年』

(“The English Revolution” Ed. by Christopher Hill.)

London. 1949. pp. 132.)

河野健 一一

はしがき

本書は、イギリス革命の三百年記念に當る一九四〇年に出版された小冊子である。以下の紹介は、一九四九年に出た新版に拠るのであるが、ヒルの説明によれば僅かの訂正が加えられただけであるところ。もじどもヒルは、「イギリス革命」(The English Revolution)と題する彼自身の論文——それは本書の主論文をなしている——について、「多大の改訂と擴大」(2)が必要であることを認めている。とくにそれは、ドップの「資本主義發展の研究」が公刊されたためである。しかし、改訂の試みは、もつぱら技術的な理由のために、實行には移されていない。

さて、本書は三篇の論文からなつてゐる。さきに擧げた「イギリス革命」のほか、マーガレット・セームス (Margaret James) による「イギリス革命當時の唯物論的社會觀」(Contemporary Materialist Interpretations of Society in the English Revolution)、およびエッジヘル・リックワード (Edgell Rickword) の「ミルトン——革命的知識人」(Milton: the Revolutionary Intellectual) がこれである。これだけでもわかるように、後の二篇は革命當時のイデオロギーの分析を旨指してをり、それぞれ極めて興味があるが、ここではイギリス革命そのものの政治的・經濟的分析を試みたヒルの第一論文に限つて、紹介することとしたい。分量の上からいつても、第一論文は全體の五分の三を占めてゐるばかりでなく、内容的にも本書の中核を

なしていると思われるからである。

まず、クリストファー・ヒルは、イギリス革命に関する研究史を回顧することから始める。イギリス革命についての最も普通の説明は、一六四〇年の議會の指導者たちによつてなされてをり、ウィッグおよび自由党の歴史家によつて繼承されている。

その主眼點は、革命を「圧制的な」政府に對する議會の勝利として説明するところにある。そして、この議會の勝利によつて、はじめて個人の自由と權利とが確立されたとする。このことはその限りでは正しいけれども、しかし問題はなお残る。というのは、革命の前の時代たるテューダーの時代に熱心に王室を支持した議會が、なぜステュアートに對立するようになったか、これはステュアートのゼームス一世やチャールス一世が單に個人として「圧制的」であつたとすることによつては説明され得ないからである。

いま一つの説明は、ウィッグに對立するという意味で「トリー」的な歴史家の主張するところである。それは、チャールス一世自身や、のちのチャールス二世の宰相クラレンドン (Clarendon) によつて主張され、王党派やカンリックの歴史家がひきついだものである。そのアイディアは、チャールス一世の政策は一般民衆を少數の資本家の擡取から守るためのもので

あつたが、これらの実業家は自己の利害と議會のそれとを同一視して、王に對抗したとする點にある。なるほど、イギリス革命は、この主張の通りブルジョアジーの斗争であつたが、しかし一般民衆はブルジョアジーよりも更に徹底的に王權に對抗したのであつて、決して王權が民衆の味方であつたなどとは言えない。

以上の二つの理論は、いずれも一面的である、なぜなら、ウィッグの理論は革命の進歩的な性質を強調する點で正しいが、同時にそれがブルジョアジーのためのものであつたことを見ないし、またトリー理論は革命の階級的性質を突きながら、その進歩性を否定し、封建制の美化と革命の否定に陥るからである。

第三に、よく用いられる説明として、革命をビュリタニズムとアングリカニズムのいずれが主導權を握るかとの紛争であるとする理論がある。たしかに、革命の兩陣營が宗教の名において自己を主張したことは事實である。しかし、當時の「宗教」は、こんにちの宗教とは意味が違つている。それは生れてから死ぬまで、人間の行動のすべてを規律するばかりでなく、死後の生活をも左右する。教會は教育や、貧民救済や、知識普及の機関であると同時に、政府の行政機関の一部として存在していた。それは、現在の秩序を維持するための宣傳機関であり、そうしたものとして政府に從属していたのである。だから、封建國家を覆えすためには、教會を攻撃し、これを倒さなければな

らない。政治理論が、宗教の衣をまとう傾きがあつたのはこの故である。

したがつて、人々が宗教の言葉で表現したのは、實は自らの階級的な欲求と利害とであつた。「牧師のうしろには地主がたつていた」のである (P. 17)。「ところで『ビュリタン革命』は、宗教上の斗争であると共に、政治上の斗争であつたが、しかし更にそれ以上のものであつた。人々が斗つたのは、イギリス社會の全性質のためであり、その將來の發展のためであつた。

二

そこでイギリス革命の歴史的な分析に移る。まず革命の經濟的背景についてであるが、十七世紀初頭のイギリスは「すぐれて」農業的な國家であるから、第一に農業の面が取り上げられる。十五世紀から十七世紀にかけて、農民の商品生産者への轉化が進行し、穀物および毛織物價格の上昇と教會領の沒收に伴つて土地の賣買が盛んになる。イギリスの農村社會は、これによつて構造的な變化を経験するか、とくにイングランドの東南部において、多くの地主は自己の所領を有利に經營することに乗り出し、「慣習」地代にかわる「抛出」地代を成立せしめる。これによつて新地代を支拂い得ない小作農民を追放し、耕地を集中して大規模な牧羊業を始めることが可能となる。新たな地主層、すなわち資本家的地主 (capitalist landowner) の階層が

生まれ、地方政治を支配するばかりか、下院における有力な勢力となる。

新地主層は、十七世紀から十九世紀にいたる三世紀の間、イギリスを支配するにいたるが、かれらの支配を支え、その「基礎」をなしたものは、農民階級の上層部、すなわちヨーマンである。十六世紀の間、かれらは經營を拡大し、商品作物の栽培や牧羊業から多くの利益を引き出し、田込みを促進する。

しかしながら、農業の資本家的發達を妨げる條件は依然として存在した。社會構造は、なお本質的に封建的である。法律や政治制度は、王室や、封建領主や封建農民の利害に従屬させられてゐる。これらのうち、「社會の焦點」をなすものとして、王室がある (P. 36)。國家權力は、寄牛階級や余利生活者の利益を守るために、國內市場の發達を防止するものとして働く。

かかる事情の下で、階級斗争は農業上の變化をいかに有利に斗いとするかをめぐつて行われる。一般に、農業上の變化は富農と小土地所有者に向上的機會を與えたが、多數の小農民にとつてはその没落を早めたにすぎない。田込みに對する小農民の斗争は、一五四九年および一六〇七年には公然たる叛亂となつて現われる。農民のプロレタリア化がこの過程の產物であることは言うまでもないが、しかし革命前における農業上の變化は、主として土地所有權 (landownership) の變化にとどまり、農業技術の革命的變化ではなかつた。したがつて一六六〇年以前に

は、進歩的地主 (improving landlord) は典型的な存在ではなかつたことを注意する必要がある。農民層のほうにしても、大部分は、なお半ば独立的な耕作者 (semi-independent cultivators) として存続することが可能であつた。かれらは、ブルジョア勢力と一時的に同盟して王權に對抗したが、一六四七年ブルジョア支配が達成されるに及んでこれと分離し、革命の左翼を形成するにいたる。

つぎに、産業および貿易の面に移る。新大陸貿易を契機とする産業および貿易の發展は、新しい階級對立をつくり出す。輸出貿易は、カンパニー商人が支配し、國內産業も中間商人による外業制度 ("putting-out system") の下に置かれ、小生産者は雇主たる商人や、高利貸 ("money") の支配に對抗する必要から独自の階級的利害をもつものとして結集されてくる。イースト・アングリアおよびミッドランドの南部地方が、小生産者達の拠点となる。

資本家的發展にたいする障害の一つは、都市のギルド制度である。ギルドの拘束を免れるために農村工業が發展し、また生産者と直結する中間商人がギルド都市の特權と拘束とに對抗しつつ發展してくる。古い産業統制が弛緩するにつれて、王室は新しい統制を押しつけるべく努力する。それが、「独占」である。王權は、封建的地主階級の利益を擁護するために、自由な生産と資本蓄積を妨害し、産業と貿易の利益を財政家や強齋者

からなる少數の宮廷グループの手に委ねるのである。かくして王權・封建地主・財政家・大商人の支配にたいする資本家的商人・進歩的地主・借地農の對抗が現われ、後者は前者に對抗するかぎり小農民・手工業者・職人と一時的に連繫することが可能であつた。

三

イギリス革命の政治的背景が、つぎに採り上げられる。テューダー王朝は、それ自体、封建制に基礎をおく政權であつたがスペインや、カソリック教會や、反對派の貴族勢力などと對抗する必要から、一定の限度内でブルジョア階級と共通の利害をもつていた。これが王室とブルジョア階級が議會を通じて協力し得たことの原因である。しかし、封建勢力が没落して寄生的性質を次第に濃くしてくるにつれ、かれらはますます王權に依存し、王權を必要とするにいたつたのに反して、ブルジョア階級は外的および内的障害が除かれると共にますます王權を必要としなくなる。ステュアート朝時代の王權と議會との衝突がこれである。この衝突の「眞の難點」は財政問題であつた。王權は、(1)ブルジョア階級とセントリーへの課税を増加するか、(2)独占によつて産業や貿易の利益を直接に獲得するか、(3)封建的貢租からの収入を増加するかの必要に迫られたが、前の二つはブルジョア階級と衝突し、最後の一つは封建勢力と衝突せざる

を得ない。そこで王権は、封建勢力とくに教會勢力——その代表的人物は大司教ロッド (Rad) ——を背景として、反動攻勢を展開するにいたつた。

一六二八年の「權利の請願」に端を發する國王と議會との衝突は、チャールス一世の親政の下にロッドとストラフォードの反動政治——Land Stratford regime——を結果し、特權法廷の強化・封建地代の重課・独占の擴大等となつて現われる。これに對するブルジョアジの反抗は、一六三七年ジョン・ハンプデン (John Hampden) の納税拒否によつて口火を切られ、三九—四〇年の一般的な納税拒否——ブルジョアジのストライキ (P. 33) ——に發展する。一六四〇年の「長期議會」(Long Parliament) は、主としてセントリーと富裕商人を代表していたが、それがなしとげた點は次の四つである。すなわち、(一) 官僚機構の破壊 (ロッド、ストラフォードの処刑・星室庁スター・チェンバの他の廃止) (二) 國王の常備軍の防止 (三) 議會の承認を経ない財政手段の廢止 (四) 議會による教會の統制。

議會内の統一は、これを期として終結する。困込みで反對する農民一揆および農民叛亂を怖れる舊貴族および進歩的でないセントリーは、下院の指導者の政策を危険視して、次第に國王側に移行する。「大請願」(Grand Remonstrance) の公刊をめぐつて、のちの王黨派が議會から退くにいたつたのは、この故であつた。大ブルジョアジもまた、民衆感情が横溢すること

を恐れて、王室との妥協による解決を望んだが、議會のこうしたためらいは、國王をして一切の交渉再開を拒絶させるに役立たにすぎない。一六四二年の夏には内戦が勃發する。

四

議會軍は最初の間、封建的な軍隊組織や古い財政・行政機構に依存したために、議會のもつ眞の能力を發揮できなかった。この缺陷を是正し革命的な軍隊は革命的な方法で組織されねばならないことを示したのは、オリヴァー・クロムウェルであつた。「何のために戦うかを知り、知つたことを愛する」兵士たちを部下に選び、「異つた意見の自由な討議」を奨励したことがこれを示している (P. 35) 議會軍の上級士官が「長老派」であつたに對して、クロムウェルの「獨立派」は、自己の財産を心配する必要のない小セントリー・ヨーマン・自由貿易のブルジョアジの階級を代表してをり、さらにそれは小農民・手工業者の大家に支えられていたのである。ブルジョアジは人民を必要としていたが、しかもお人民を怖れていた。「長老派」はチャールスがその氣になりさえすれば、王政を民主主義の齒止めとして残すことを望んでいた。しかし、一六四四年マーストン・ムーアでクロムウェルは大勝利を博し、議會軍は民主主義的な新「型」軍に再編成される。

一六四五年「新型軍」が「王黨軍」をうち破つて勝利を得た

のち、危険がまたもや訪れた。議會の主力たる「長老派」は、國王と取引を開始し、「新型軍」を解体し、これをアイルランドに追拂うことを企てる。これに對して軍隊は兵士たちのイニシアティブにもとづいて民主的な「軍隊評議會」(Army Council)を結成し(一六四七年)、イギリスの自由が確保されるまで解散しない旨の嚴肅な「協約」をとり結ぶ。軍隊はチャールスを逮捕し、ロンドンへの行進を開始し、下院の「長老派」を逃走させる。

「獨立派」のセントルメンが希望したのは以上のところまでであつた。かれらは敵を一掃したからには、もはや古い制度で充分満足であつた。しかし、軍隊内の「水平派」に代表された小ブルジョアジーは、さらに廣汎な改革を要求した。かれらは小生産者の完全な自由取引・國家と教會の分離・十分の一税の廢止・小財産の安全・債務者法の改革、さいごに以上のすべてを確保するために共和政の確立・議會の權限の擴張・世帯主の選舉權の獲得を要求した。一六四七年の「人民協約」(Agreement of the People)は、この反映である。

國王の逃亡に端を發した第二次内亂の結果、議會の妥協派は一掃され(Pride's Purge)、一六四九年一月チャールスの処刑に次いで、五月には共和政が宣言される。しかし「水平派」の要求、とくに經濟的・社會的改革は實現されるべくもなく、かれらは孤立的に反亂を起したが直ちに鎮壓されてしまう。ブルジ

ョア革命が成就した最もラディカルな要求は、「水平派」の力によつてのみ達成されたのであるが、元來、不安定な・自らを組織し得ない階級である小ブルジョアジーの代表者であつたかれらは、内亂の過程における階級分化の進行によつて存立の基礎を失つたのである。

イギリス革命におけるプロレタリア運動はそれ自体としては存在しないが、それに最も近いのはデイガー(Dieter)の運動である。それは土地を失つた農業プロレタリアによる農業コミューニズムの實現を目指した運動であつた。かれらの運動そのものは擴大しなかつたが、かれらの指導者ゼラード・ウィンスタシー(Gerrard Winstanley)の思想のなかに、史的唯物論と科學的共產主義のさきがけが見られる。

クロムウエルによる「水平派」の擅圧は、大ブルジョアジーと地主を人民勢力から切り離し、王政と封建勢力の復活への途を閉くこととなる。クロムウエルは、長期議會を解散し、一六五三年みずからプロテクターたることを宣言し、事實上の王政に近い憲法(Tumble Petition and Advice constitution)を作り上げる。クロムウエルの死後二年して、チャールス二世が復活する(一六六〇年)。

右の經過は、内亂の二十年間に革命勢力のなかで急速に階級分化が進んだこと、「獨立派」のセントリー、すなわちオリヴァー・クロムウエルの階級が教會や貴族の沒收地を買入れ、旧

支配階級の地位にとつて代わつたことを示している。しかし、その結果として齊らされた王政復古は、決して舊秩序の復活ではなかつた。「神の恩寵」による國王は、「商人と地主の恩寵」による國王となり (P. 76)、宗教上の自由は確立され、封建的土地所有は廢止された (一六四六年)。他方、小農民の所有權を確保するための民主主義運動は失敗に歸したため、農民の土地取上げに困込みは地主階級の利益において急速に進むこととなる。産業界においても、独占やギルドは消滅し、イギリスの様相を一変させた十八世紀の産業革命および農業上の変化の前提條件が整備される。それは十七世紀の革命を経過することによつて、始めて可能となつたのである。われわれの獲得した成果はわれわれの祖先が行つた斗争によつてのみ得られたのであり、それは恰かもわれわれがその自由を斗争によつてのみ確保しうることと同様である。ウインスタンリーは言つてゐる。「自由とは世界をひつくり返す人間のことである。だから彼が敵をもつことは少しも不思議ではない」 (P. 82) 十七世紀は、今日のわれわれに多くの教訓を與えずにはおかないのである。

五

以上、かなり詳しくヒルの論旨を紹介してきた。つぎに簡單な筆者の感想をしるして本稿を終りたい。本書は小冊子であるために説明の不充分な點、あるいは資料的な裏づけに不足する

點があるのは止むを得ない。しかし「イギリス革命」を社會科學の立場から明快に分析したものとして、本書が從來の乏しい文献に大きな寄與をなしていることは、右の紹介から推察してもらへるであらう。ヒルはドップとともに、イギリスにおけるマルクス主義の歴史家として注目されている人であるが、彼によつて一層、本格的な革命研究が發表されることを期待するのは、筆者ばかりではないであらう。

一二の問題點を挙げれば、イギリス革命を封建的土地所有の廢棄を目指す社會革命として把握している點は、本書の卓越せる所以であるが、しかし封建的土地所有關係が構造的に、社會の全機構の核心として把握されているかと言へば、なお不十分であると言わざるを得ない。これは一つには、イギリス革命の不徹底さに、さらに言えばイギリス封建制の特殊な性質につながるものであるが、この點ヨーロッパ大陸とくにフランスの革命と對比して、イギリス革命をいまだ一度定着したならば、さらに明確になつたであらう。

これと關連するが、ヒルの分析では社會構造の問題が種々の社會階層階級の動きとして説明されている。このことと一體は誤りではないにしても、例えばヒルが「進歩的地主」あるいは「資本家の商人」という階層をとり出す場合、それらの階層が基礎構造といかに關連しているか、とくに基礎構造がそれらをいかなる面で制約しているかを明らかにしなければならぬ。この

点で例えば、わが國でとくに採り上げられているマニユファクチュア問題にヒルが殆んど觸れていないことが指摘されるであらう。ヒルの説明をもつと通俗化すれば、彼が、「進歩的」または「資本家的」という形容詞を用いるとき、それが地主や商人の個人的な性質に歸着してしまつて、その歴史的・社會的役割が正當に評價されなくなる危険がでてくる。「進歩的」地主や商人が、いかなる點で進歩的であり、いかなる點でそうでないか、これは特にクロムウエルの「水平派」墾庄・ブルジョア革命の終末を理解する上に重大な問題であるが、この點を經濟史の上で確定してもらえば、一層、説得的であつたであらう。

いずれにせよ、われわれはクロムウエル革命を科學的に分析するための出發點をここに與えられたことになる。本書の卷末にある參考文献とともに、本書がわが國の學界を益することが多いであらうことは、疑いを容れない。

(一九五一・一二・二〇)

執筆者紹介

出口 勇藏	京都大學教授
平井 俊彦	京都大學講師
菱山 泉	京都大學大学院特別研究生
山口 和男	同
井上洋一郎	京都大學大学院學生
河野 健二	京都大學助教